

3 宗教としてのイスラム

イスラム教とは

ヨーロッパをキリスト教世界とすると中東はイスラム世界ということになる。ただ、いずれの地域も宗教的には多様性があり、ヨーロッパでは人口の5%近くはイスラム教徒であり、中東にもキリスト教徒やゾロアスター教など、他の宗教の人たちが住んでいる。

また宗教にあまり熱心でない世俗派も多い。例えばトルコでは公式には人口の99%がイスラム教徒とされているが、信心深くない世俗主義者はイスタンブールやアンカラの大都市には沢山いる。中東を熱心なイスラム教徒だけが住む地域と考えるのは大きな間違いである。

信者の数も当てにならない。不思議なことに世界の宗教人口は世界の総人口よりもずっと多い。信仰深くない人や無神論者もいるのになぜなのか。これは日本も同じで、平成29年の文化庁の『宗教年鑑』によると、各宗教の信者数が次のようになっている。

神道系	8474 万人
仏教系	8770 万人
キリスト教系	191 万人
その他	791 万人

合計すると1億8226万人、日本の人口の1.5倍にもなる。私自身は信仰をもっていないし周りをみても信心深い人は少ない。外国の人がこの数字をみて、しかも神社やお寺を訪れそこで手を合わせている多くの日本人をみると、日本人はなんと宗教的な人たちだと思いに違いない。もちろんこれは誤解なのだが。

日本人一般の宗教観また信仰心はどのようなものなのだろうか。前回「気候と風土」のところでもお話したが、色んなものに神が宿っており、これらの神のほとんどは、願い事を聞いてくれ危害を加えることがない救いの神である。受験の神様もいれば病気直しの神様もいる。病気直しも分業で、膝の痛みを直す地蔵、安産の神、眼病や虫歯の神などバラエティーに富んでいる。いずれも願いをかなえてくれるやさしい神で、パワーがある。

こうした日本人の宗教観ゆえに、生まれると神社（神道）でお宮参り、結婚式は教会（キリスト教）、そして死ぬとお寺（仏教）で葬式、といった客観的にみるときわめて奇妙なことがおこる。

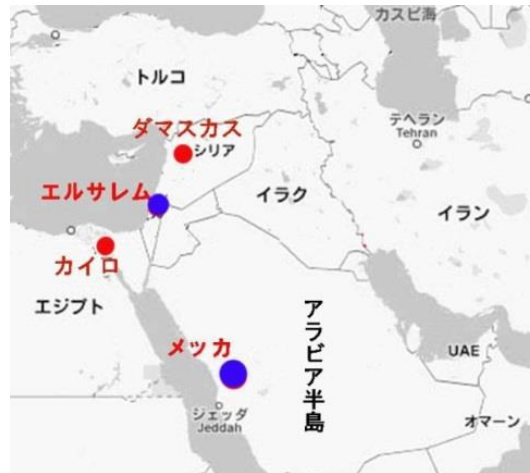
3 宗教としてのイスラム

こういう宗教観の我々日本人がイスラム教を理解するのは非常に難しい。日本の神とはまったく違った神であり、神と人との関係も大きく異なる。同じ「神」という言葉を使わない方がよいのかも知れない。

イスラム（イスラム教）は、アラビア半島のメッカの商人であったムハンマドが AD 610 年に創唱した。当時のアラビア半島は、それぞれの部族が信仰する神をもつ多神教の世界であった。

これに対してムハンマドが創始したイスラムは唯一アッラーのみを神とする**一神教**であり、世界各地に広がり、現在は信者数が 16 億人といわれる**世界宗教**に発展した。もっとも先にみたように宗教人口の統計はあまり信用できないので、正確なところはわからない。

図 3-1 イスラムの聖地メッカ



*イスラムは一神教だが、一神教と多神教の違いはなにか。

一神教：唯一の神を認めて信仰する宗教（キリスト教、イスラム）

神は絶対であり真実は一つだから、複数の神が存在することはない。

多神教：多くの神々が信仰される宗教（神道、ヒンズー教、道教）

*イスラムは世界宗教の一つだが、世界宗教と民族宗教の違いはなにか。

民族宗教：特定の民族、人種にのみに信じられている宗教。

血縁・地縁的結合の強固な民族にみられ、排他性が強い（ユダヤ教、神道）

ユダヤ教はユダヤ人の宗教で、ユダヤ人以外はユダヤ教徒になれない。

また自分たち民族は神に選ばれた人たちであるという選民思想がある。

世界宗教：民族や人種とは関係なく神のもとでの平等を原則とする。

また思想がわかり易く、民族を超えて世界で信仰されるようになった。

（イスラム、仏教、キリスト教）

「イスラム」の本来の意味は「唯一の神アッラーに絶対服従すること」、また信者である「ムスリム」（イスラム教徒のこと）の本来の意味は「絶対的に服従するもの」である。

つまり、神はただ一つで、この神に対して信者は絶対服従しなければならない。もっともこれはイスラムの原理としてであって、熱心でないイスラム教徒が「絶対服従」している訳ではない。

イスラムの誕生

ムハンマドは山にこもって思索にふけているとき、天使を通して神の言葉を聞いた。俗にいう「神のお告げ」というものであり、これを「啓示」という。

ここのところが我々凡人にはよくわからない。神のお告げは「幻聴じゃないの」とか「神の名を借りて政治的な何かを企てているのではないのか」とかんぐってしまう。しかしイスラムを考える上でこの点はあまり重要ではない。信者にとっては疑うことなく信じるのがまずは出発点となる。ミッションスクール出身の知人が、宗教の時間に「キリストの復活」を信じると繰り返し説教され辟易したと言っていたが、疑問を感じる人は信者になれないし、ならない。

啓示（神の言葉）を聞き、これを人々に伝える、神と人との仲介者のことを**預言者**という。ムハンマドはまさに神の言葉を聞き、人々にそれを伝えた預言者である。

ウィキペディアでは、預言者についてつぎのように説明している。

「自己の思想やおもわくによらず、靈感により啓示された神意（託宣）を伝達し、あるいは解釈して神と人との仲介する者。」

しかし、預言者をより人間臭い存在とすると「自己の思想やおもわくによって・・・」とするほうがわかりやすい。つまり預言者を、神の名を借りて自分が思索したことを伝え、信者になった人々に影響力を及ぼそうと尽力した人、とするのも一つの考え方である。

いずれにせよ、神の啓示を信じることで成り立つ宗教が啓示宗教である。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はいずれも啓示宗教であり、キリストもムハンマドも預言者だった。

3 宗教としてのイスラム

預言者ムハンマドは、神からの啓示を死ぬまで受け続けたとされる。これは、ムハンマドが生前に言ったことまた行ったことはすべて神の意思による、ということの意味している。ムハンマドは信者を次々に増やし、多神教のアラブの部族との戦争で勝利し、イスラムへの改宗者を増やしながらかアラビア半島での支配地域を拡大していった。ムハンマドは宗教と政治の指導者であり軍の司令官でもあった。

彼は、彼が政治・宗教のリーダーとして作った国（宗教共同体）を統治するために、信者が従うべき規則を作り法律も定めた。信者が行うべき宗教上の行為も決めた。イスラム教では、ムハンマドが死ぬまで神から啓示を受け続けたことになっているから、彼が生前に行いまた定めたことは神からの命令ということになる。つまり見方をかえると、ムハンマドは宗教によってアラブ世界の統一を試みた類まれなる政治家ということになる。

要点

- ① ムハンマドは、国（宗教共同体）を宗教によって統治するため、さまざまな規則をつくった。その一つは法律で、民法、刑法、訴訟法など幅広い領域にわたる。また信者としてやるべきこと、守るべきことを細かく決めた。
- ② ムハンマドは生涯啓示を受け続けたから、法律など彼が決めたことや彼が話したり行ったことは、神の意思によるものとなり、正しく間違いのないこととなった。

コーラン（クルアーン）（第一の聖典）：

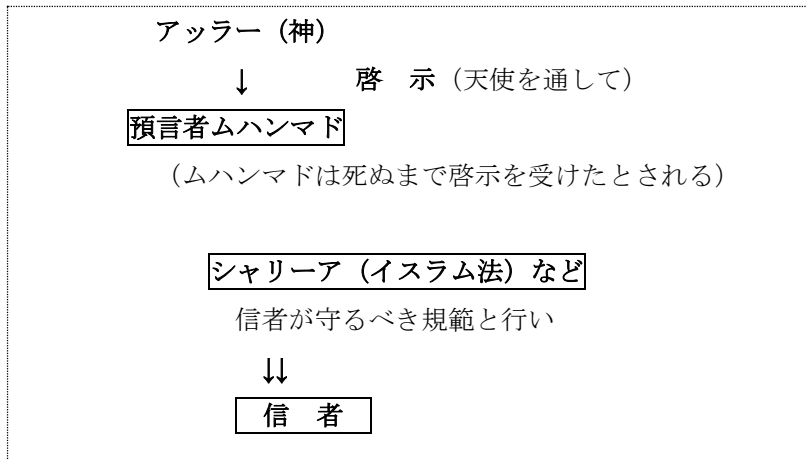
ムハンマドの生前の記録（神の言葉）を彼の死後にまとめたもの

ハディース（第二の聖典）：

ムハンマドが日常生活の中で語り行ったことの証言をまとめたもの

このため、ムスリム（イスラム教徒）はこれに従うことが求められた。

このコーランとハディースをもとに、人々の生活のための規範（価値観、規則、法律など）として作られたものが**シャリーア（イスラム法）**である。これは神が授けた規範だから人間がこれに手を加えることは出来ない。人間にできるのは解釈であり、イスラム法学者がこれを担った。ムハンマドが生きた時代は7世紀だから、現代に適用するにはさまざまに解釈が必要になる。



「五行」

イスラムでは信仰だけあればよいというのではなく、正しい信仰が行為により具体的に示されなければならないとする。この行為が五行

① 信仰告白

「アッラーのほかには神はなし」、「ムハンマドはアッラーの使徒である」を唱えること。

② 礼拝



礼拝は、メッカのカーバ神殿の方向に向かって1日5回行うのがよいとされる。

休日である金曜日の礼拝は、5回のうち1回はモスクに集まって行うのがよいとされている。

③ 喜捨 (ザカート)

貧者を助けるための喜捨

④ 断食

断食月（ラマザン）の一か月間、夜明けから日没まで飲食は禁止。

2020年は5月半ばからラマザンに入ったが、この間礼拝などで3密が守られず、新型コロナウイルスの感染が急速に高まっているという。

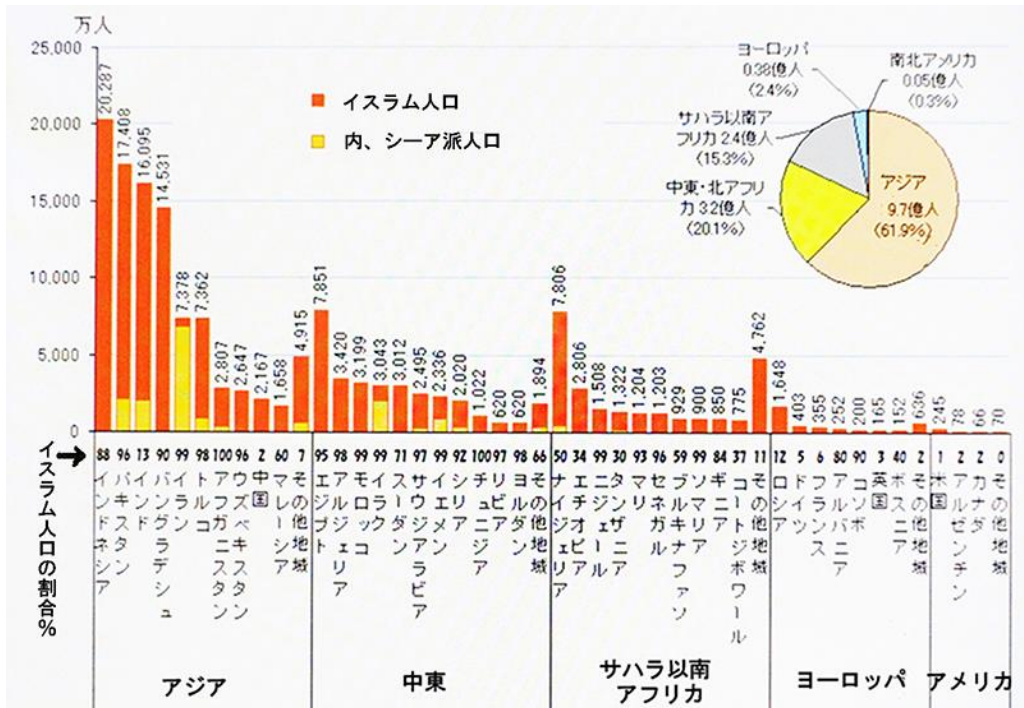
⑤ 巡礼

イスラム教徒は一生に一度、団体に聖地メッカに巡礼するのが望ましいとされている。

イスラムの分布

総人口に占めるムスリム（イスラム教徒）の割合は、図 3-2 が示すように中東が最も高く、中央アジアやサハラ砂漠以南のアフリカや東アフリカにもムスリムの割合が高い国がある。しかしイスラム教徒の数でいえば、パキスタン、インド、バングラデシュなどの南アジアやインドネシア、マレーシアなどの東南アジアの方が多い。インドはヒンズー教徒が多くムスリムは人口の 10%ほどだが、総人口が多いためムスリムの数では 1.6 億人と多い国になっている。

図 3-2 各国のイスラム教徒の人口（2009 年）



3 宗教としてのイスラム

グローバル化が進む現在、ムスリム（イスラム教徒）の数はヨーロッパやアメリカでも増加している。ヨーロッパではボスニアが人口の半分近くがムスリムだが、西ヨーロッパでは約5%、その内、フランスでは6%、今後この比率は各国で高まっていくと考えられている。

ヨーロッパでイスラム教徒が増えたのは、第二次大戦後の経済発展の時代に労働力不足を補うために沢山の労働者を中東や南アジアから受け入れたことに始まる。フランスはマグレブ諸国（モロッコ、アルジェリアなど）から、ドイツはトルコから、またイギリスは南アジアからイスラム教徒が数多く流入し、その後、彼らが家族を呼び寄せ、二世、三世が誕生したことでムスリム人口が増えていった。

また難民として流入した人々も多い。近年ではシリア内戦による難民が百万単位でヨーロッパに向かった。イスラム教徒の増加でヨーロッパ社会が今後大きく変質していくと考えられている。

イスラムの拡大

図 3-3 世界におけるイスラム教徒の分布

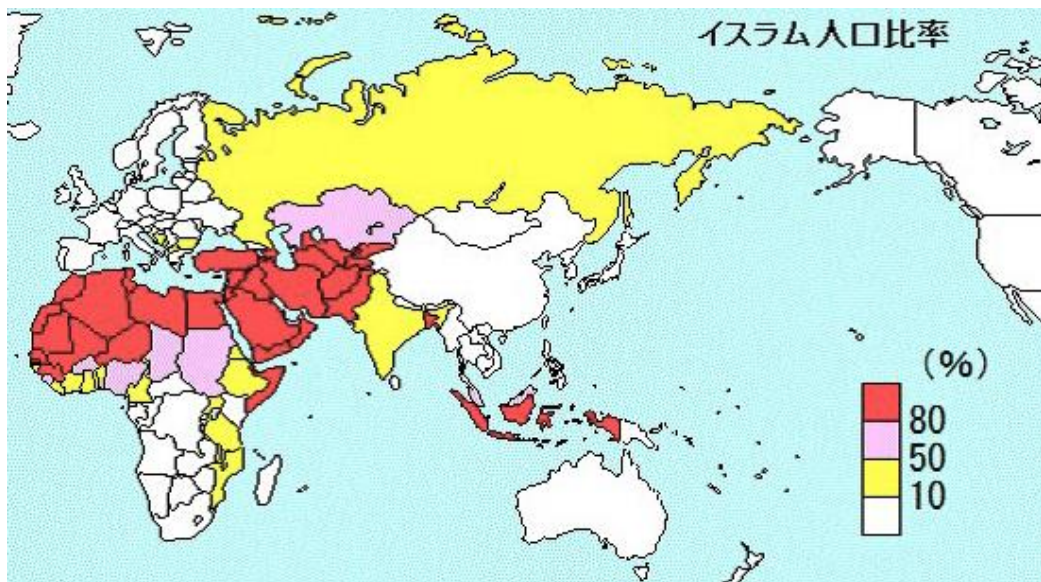


図 3-3 は、世界各地における人口に占めるイスラム教徒の割合を示している。中東と中央アジアで密度が高く、東南アジアではインドネシアとマレーシアで割合が高い。アフリカでは西アフリカの内陸と東アフリカで多くなっている。

これらの地域でイスラム化がどのようにすすんでいったのだろうか。

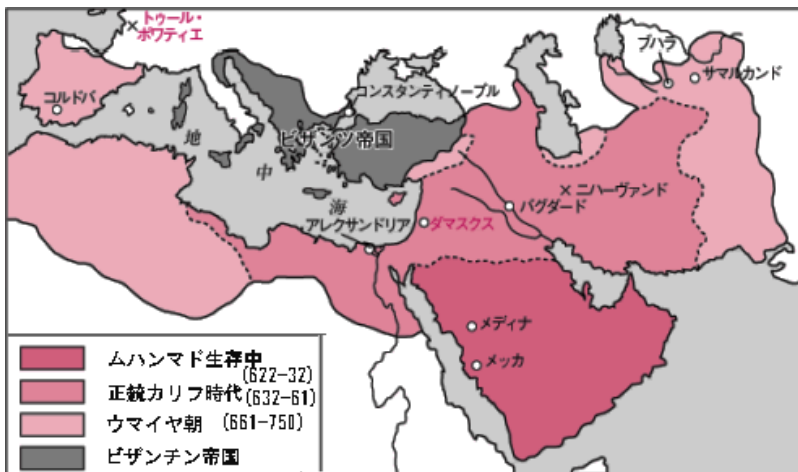
- ① 軍事的な征服とイスラム国家の形成
- ② 海上交易や遠距離交易による商業交易の発展
- ③ スーヒー教団の草の根的活動

① アラブによる軍事的な征服とその後に中東と中央アジアを支配するモンゴル系やトルコ系の騎馬遊牧民の王朝のイスラムの受容。

イスラム教の誕生以降、アラビア半島に住むアラブ人により軍事的な征服が進み、100年余りで、中東はもとより北アフリカからイベリア半島（現在のスペイン）、西北インドにまで領土が拡大し、帝国内でのイスラム化が進行した。

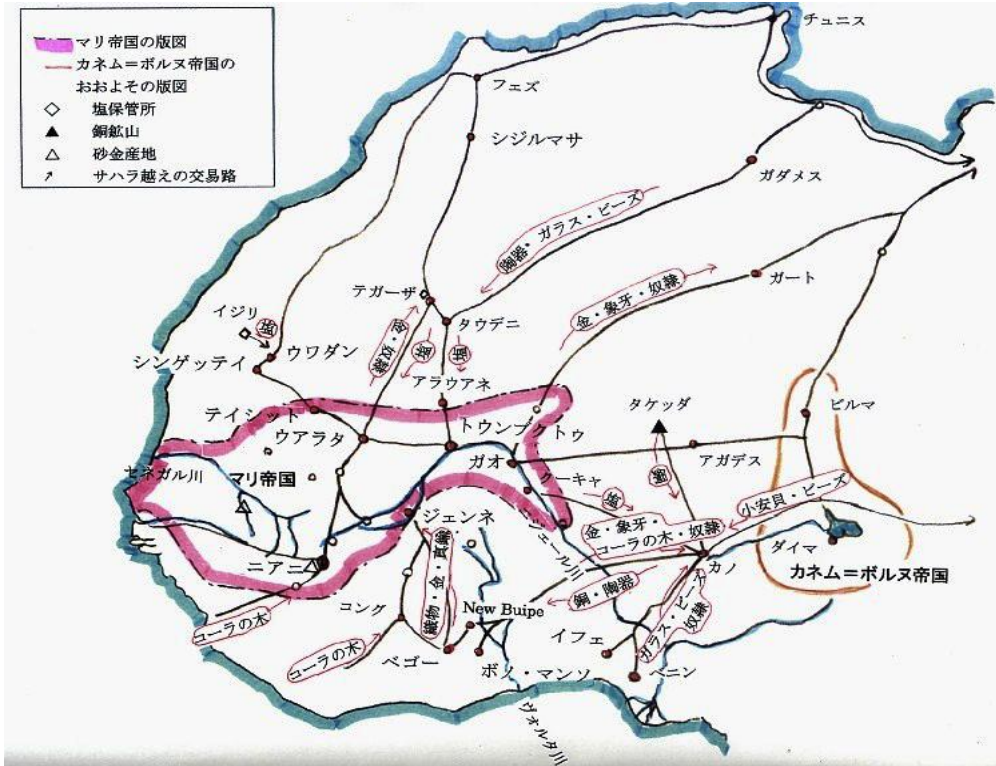
中央アジアへは、この地域に覇権を握ろうと進出してきた中国の唐との751年の戦争（タラス河畔の戦い）でイスラム軍が勝利して以降、イスラム化がはじまった。この地方のイスラム化はその後に登場する主としてトルコ系の王朝によって進められた。

図 3-5 7,8 世紀におけるイスラム帝国の拡大



② サハラ以南のアフリカや東南アジアのイスラム化はこれよりも遅く、13世紀以降、ムスリム商人による交易を通して進んだ。

西アフリカ地域では、サハラ砂漠をキャラバンで越える交易が盛んに行われ、この交易を通して徐々にイスラム化が進んだ。13世紀に興ったマリ帝国の時代に交易は活発化、西アフリカからは金や象牙、アラブ世界からは塩などが主な交易品だった。1324年にはマリ帝国の王が数千人の従者と大量の金をもってメッカ巡礼に訪れている。



マリ帝国とサハラ交易

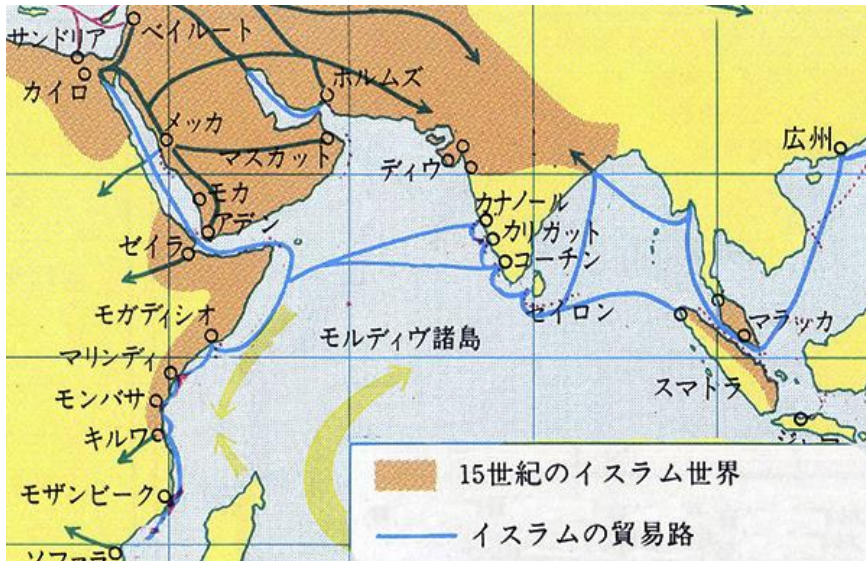
また東アフリカは、後に詳しく話すことになるが、インド洋の季節風を利用した交易がアラブやペルシヤ世界と活発に行われ、この商業交易を通してイスラム化が進んだ。この交易によってアラビア文化の影響を受け、東アフリカの海岸地帯には外来文化と言語の影響を受けたスワヒリ文化が生まれた。

東南アジアも、東アフリカと同様に、アラビア海、インド洋のいわゆる海のシルクロードの交易を通してイスラム化が進んだ。交易地にムスリム商人たちの根拠地ができ、ここを拠点に現地の有力者や住民の改宗が進んだ。



川田順造「地域からの世界史9」

図 3-4 15 世紀の海洋交易



③ イスラム帝国の拡大とその後の王朝の興亡によって、権力者のイスラム化が即、都市に居住する庶民や農民の間にイスラム化につながったとは必ずしもいえない。12世紀頃からスーフィズムと呼ばれる神秘主義の教団が各地に生まれた。これらは托鉢や踊りなどを通して草の根的に布教を進め、シャリーアなど規範の重視ということではなく庶民の心理により接近した形での宗教を広めていった。とくに、アフリカや東南アジアでは、イスラムの商人とともに神秘主義の教団の活動がイスラム化に重要な役割を果たした。

イスラムの宗派 スンニーとシーア

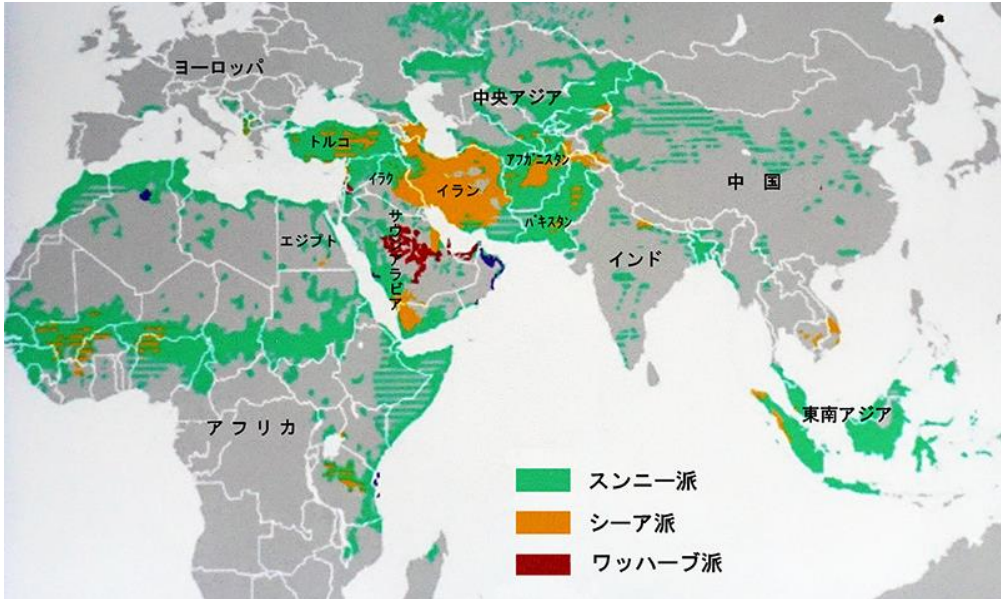
イスラムは、その誕生以来、リーダーの選び方や教義の違いなどでいくつもの宗派に分かれてきた。この内、大きな宗派はスンニー派とシーア派である。世界のイスラム人口では、スンニー派が9割を占め、イランとイラク南部に多いシーア派は1割程度である。この2つの宗派はイスラム誕生後まもなく、ムハンマド死後のイスラムの指導者の決め方をめぐる対立で分かれた。

ワッハーブ派はスンニーの一派で18世紀にアラビア半島の内陸で生まれサウジアが守護者となっている厳格な宗派である。

3 宗教としてのイスラム

現在、中東における国家間の対立が宗派対立の要素を強めている。国内の紛争が、周辺の国々や宗教勢力によって、宗教紛争として煽られることが多い。

図 3-5 イスラム教徒の宗派別分布



注) グレーのところはイスラム教徒が非常に少ないか人口希薄なところ